

研究結果

本研究はモンゴル人と日本人の学者が協力して行った共同研究である。一年間の共同研究により、「満洲国」時代とは長い歴史の流れの中の、たった14年間という短い期間ではあったが、内モンゴル地域におけるモンゴル族の文学にとっては、長い間影響を与えるものであったことがわかった。纏めると、以下の通りである。

まず、教育の普及により、大勢の知識人が育てられた。またモンゴル語の新聞・雑誌が出版されることにより、かれらにモンゴル語で文章を発表する場が提供された。

次に、最初の段階では、モンゴル語のオリジナル作品が少なく、翻訳しただけの作品が多かった。また、モンゴル独特の作品においても、古くから伝わる口承文芸が主導的な地位を占めていた。或る意味では、内モンゴルの各地方においてモンゴル人が無意識のうちに口承文芸を収録し、整理することになった。

また、受けた教育のレベルが高くなるにつれて、モンゴル語で書かれたオリジナル作品が徐々に多くなってきた。モンゴル族の現代文学における各ジャンルの基本を成す作品が、当時現れ始めた。このうち数名の文学者が育てられた。しかし、作家の作品の数の変化や作品の内容などに、植民地であったことの影響が出ており、自由な作風が阻まれた状態があちこちで見られる。これが、内モンゴルにおいてモンゴル族の文学が一応発展したにもかかわらず、優れた文学作品が出て来なかった原因の一つと思われる。

上述した内容を以下の論文にまとめつつある。現在までに、一つの論文を昨年10月に北京で行った『全国モンゴル民族民間文学学会』で発表し、今年6月に遼寧出版社から出版される『全国第十一次少数民族地区の図書館学術討論会論文集』に投稿した。また『モンゴル学研究』の第三号に一つの論文を発表する予定である。「20世紀前期のモンゴルメディアに関わった日本人達」という論文を書く予定であったが、情報不足により一つの論文にまとめ上げられない状態である。現在、『「満洲国」時代のモンゴル族植民地文学研究』という本を書いているところである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「満洲国」時代のモンゴル児童文学——「イソップ」寓話を中心に、永花、全国モンゴル民族民間文学学会、2009年10月、北京。

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

「満洲国」時代モンゴル機関紙の変化、永花、全国第十一次少数民族地区の図書館学術討論会論文集、2010年6月。

ハフンガの「満洲国」時代の文学作品研究、サラングレル、モンゴル学研究、2010年第三号。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

『「満洲国」時代のモンゴル族植民地文学研究』、サラングレル・小長谷有紀・永花、内モンゴル人民出版社、2011年(出版社に変化がある可能性がある)。